

国立天文台・天文情報センター・アーカイブ室 中桐正夫

***旧図書館から出てきた16mmフィルムのデータ化—その2— (黒点スケッチ)**

アーカイブ室新聞第569号に「旧図書館から出てきた16mmフィルムのデータ化できる」という記事を書き、若き日の元東京天文台職員田鍋浩義氏が東京天文台を、小学生たちを案内する映画が発見されたことを紹介した。この中に、ツアイス製20cm赤道儀屈折望遠鏡で太陽黒点のスケッチをする田中幸明氏の様子が写っている。今や黒点スケッチという仕事は国立天文台では10数年前に止めてしまっている。おそらくこの黒点スケッチを最後にやっていた職員はこの3月(2012年)に定年退職する宮下正邦氏であろう。宮下氏に確認したところ最後の黒点スケッチは1998年だったそうである。スケッチによるデータは太陽活動の記録としては高く評価されるものであったが、CCDによる写真撮影に置き換えられている。田中幸明氏などが黒点スケッチをやっていた頃はわずかな晴れ間を縫って観測をやっていたし、大気による像の乱れ(シンチレーションという)を避けて克明なスケッチを行い、長年にわたるデータが蓄積されていた。太陽は視直径30分ほどであるが、30分の視野全体がよいシーイング(天体の像のシャープさ)ということではなく、瞬間、瞬間ある場所のシーイングがよくなるのを捕えてスケッチしていく技が必要であった。写真1が写真に残っていたスケッチ観測をする田中幸明氏である。

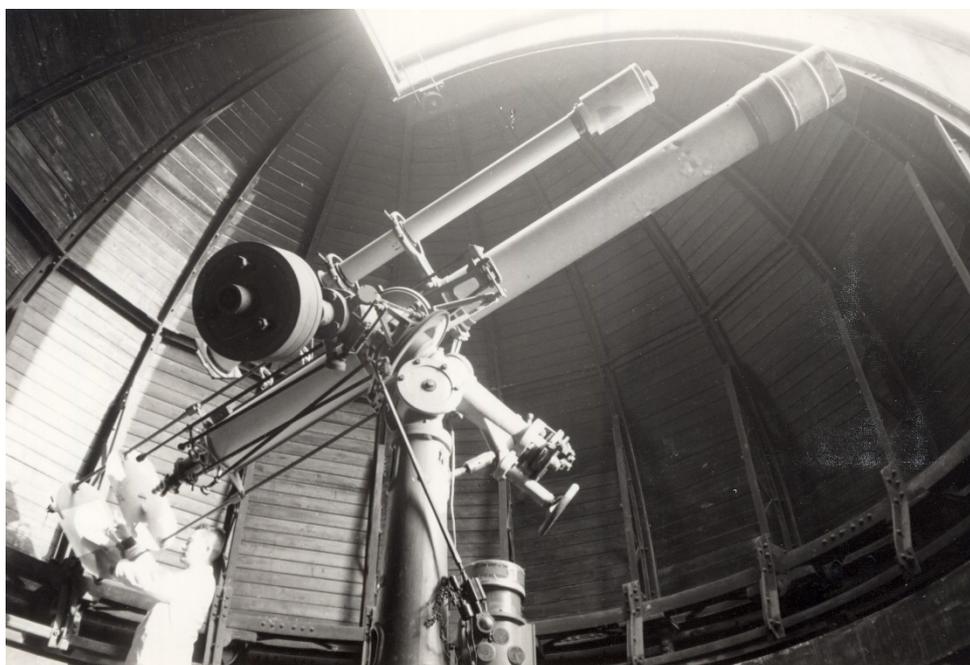


写真1 黒点のスケッチ観測をする田中幸明氏

今回見つかった16mmフィルムには黒点のスケッチ観測の様子を小学生に実演してみせる田中幸明氏がはっきりと写っている。天文台で働くものでも、実際のスケッチ観測を見た

ものは少なく、これが動画として映画に残っていることは貴重である。

写真2が、映画の一コマで、スケッチ観測をする田中幸明氏である。



写真2 黒点スケッチを見せる田中幸明氏

写真3は、黒点スケッチをする様子である。



写真3 鉛筆を走らせる一コマ

黒点の様子を素早く描いて行く様子に見入る小学生に目が輝いているのがよくわかる。
写真4はその様子である。



写真4 黒点スケッチに見入る小学生

写真5は淡い黒点をスケッチする様子である。

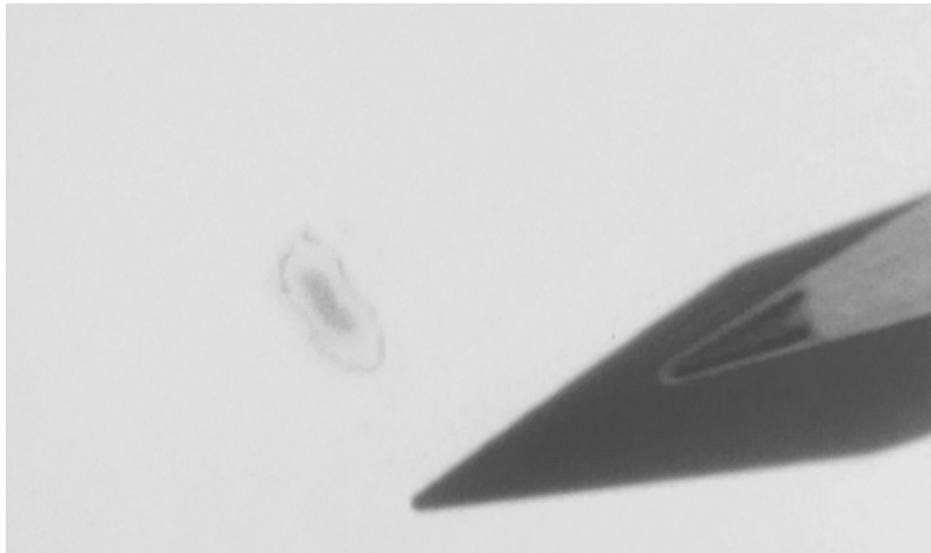


写真5 淡い黒点スケッチ

このように実際に黒点スケッチの様子が記録されていた映像が残っていること自体が貴重なことである。この黒点スケッチ一筋で天文台人生を終えた田中幸明氏は耳が不自由な方であった。黒板で、あるいはメモ用紙で筆談したことが懐かしく思い出される。

これらアーカイブ室新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp